

若手研究者からみたメディア研究の課題
- 学会との関わり方を手がかりに -

企画趣旨

若手ワーキンググループは、若手研究者が活躍できる機会の拡大を通じて、本学会の活性化を目指すべく、課題の整理や意見の集約などを進めている。春季研究大会では「変化するメディア環境とマス・コミュニケーション研究の今後 ―若手研究者の視点―」と題する“若手セッション”を企画し、本学会における若手研究者の現状や課題について幅広い議論を行った。ここで浮上した論点をふまえて、第2回目の若手セッションを開催したい。

近年、「ポストメディア」や「アフターテレビジョン」などの言い方で、マス・コミュニケーション研究やメディア研究のあり方が問われる機会が多くなっている。

そもそもマス・コミュニケーション研究は、新聞やラジオ、次いでテレビといったマスメディアの効果研究を直接の起源とする。もともと日本新聞学会であった本学会の歴史を考えてもそのことはわかる。そうした研究領域に、文化社会学、マクルーハン理論、カルチュラル・スタディーズなどの研究潮流が合流するかたちで、1990年代にはメディア研究という領域が新たに形成された。

もともと、2000年代に本格化したインターネットやデジタルメディアの社会的普及、あるいはグローバル化の急速な進展などで、従来の理論枠組ではうまく捉えられない事態が増えている。こうした現状をふまえて、本学会でも新たな理論の展開が求められているものの、実際には学会誌に理論研究は少ないことも指摘されている（『マス・コミュニケーション研究』90号/特集「マス・コミュニケーション研究の現在：理論研究への視座」）。

その一方で、近年の若手研究者のあいだでは、一見すると理論志向とは距離をおいたようにみえる（一次資料を重視する）歴史研究への注力が目立っている。その表れが、近年盛んに学会誌に掲載、あるいは書籍として出版されている、メディア史やメディア考古学を冠した研究群だろう。

さらに、2000年代には、カルチュラル・スタディーズ学会や日本マンガ学会、日本デジタルゲーム学会など、マスコミ四媒体ではないメディア、あるいはインターネットやデジタルメディア、それらが形成するメディア文化を扱う学会の設立も相次いでいる。若手研究者から見れば、学会活動の選択肢が増えているともいえるが、研究対象や研究方法によって学会が細分化してしまっているという見方もできる。

以上の背景をふまえて、本セッションでは、理論研究と歴史研究との関係をひとつの補助線として、多様化・細分化する学会に対する若手研究者の関わり方に焦点をあてることで、マス・コミュニケーション研究やメディア研究の課題を考えたい。

登壇者

問題提起者：

- ・近藤 和都（日本学術振興会、早稲田大学）
- ・西原 麻里（愛知学泉大学）

討論者：

- ・飯田 豊（立命館大学）

司会：

- ・松井 広志（愛知淑徳大学）

日時・場所

- ・2018年10月19日（金） 18:00～20:00（予定）
- ・関西大学東京センター（<http://www.kansai-u.ac.jp/tokyo/map.html>）
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階 TEL.(03)3211-1670(代)